



公益社団法人
日本理学療法士協会
JPTA Japanese Physical Therapy Association

JPTA



NEWS



2018

特集

理学療法を学問する ～学問で臨床が豊かになる～

AUGUST

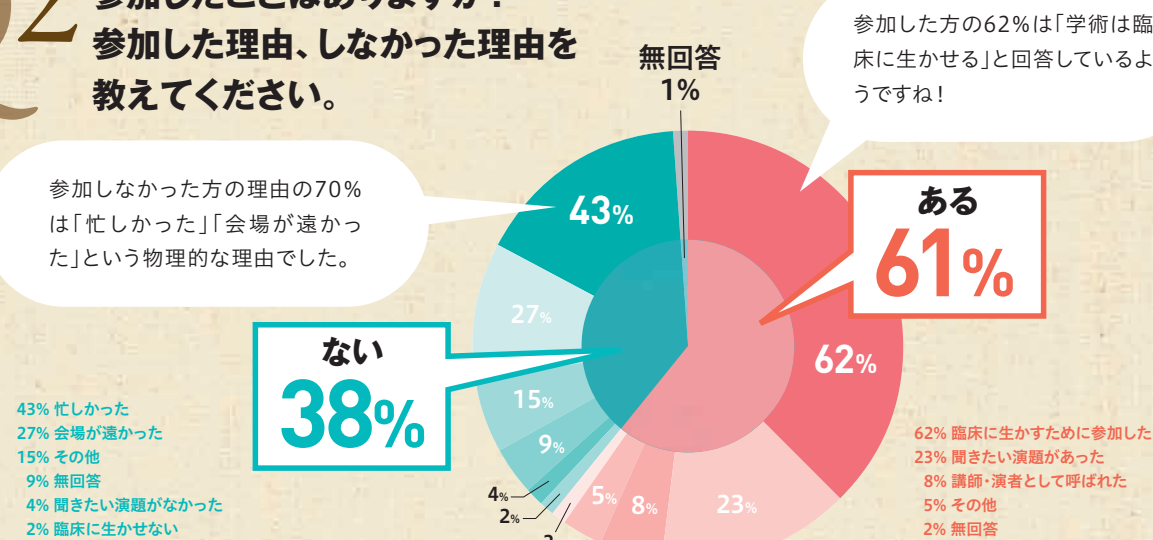


vol 314

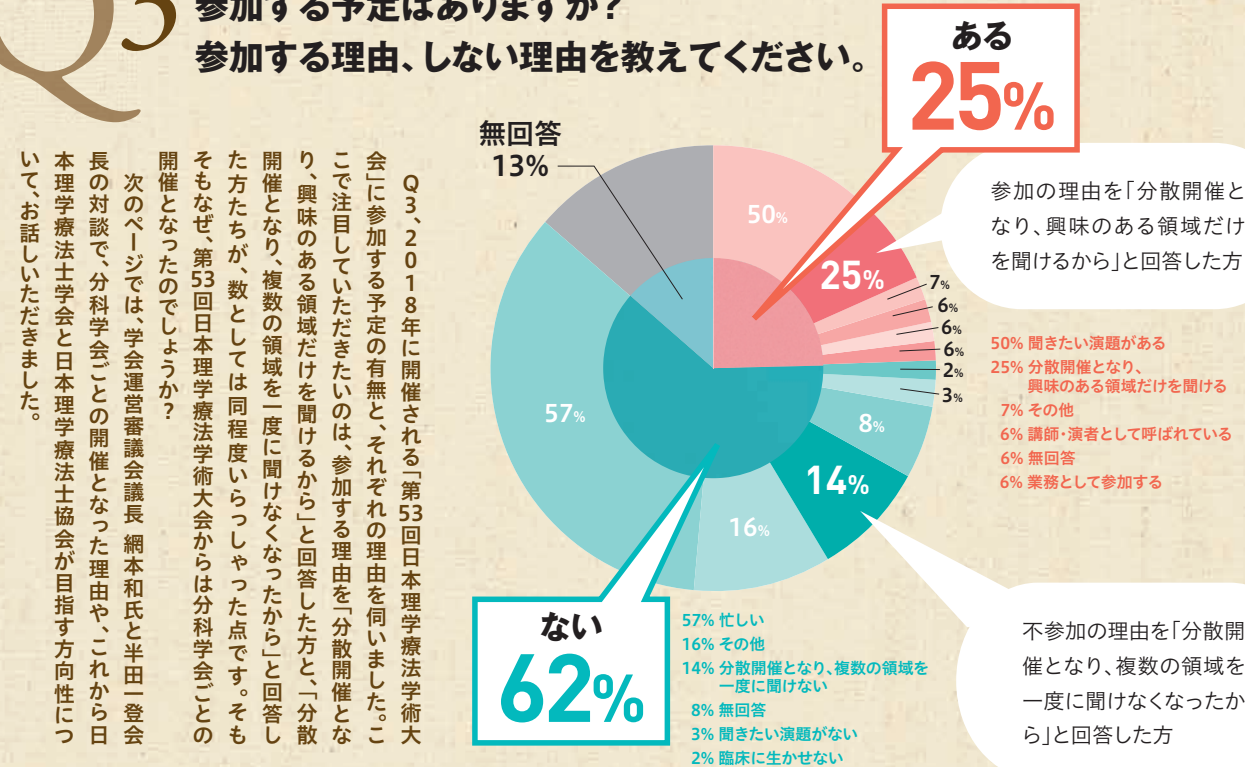
8

テーマ 理学療法を学問する ～学問で臨床が豊かになる～

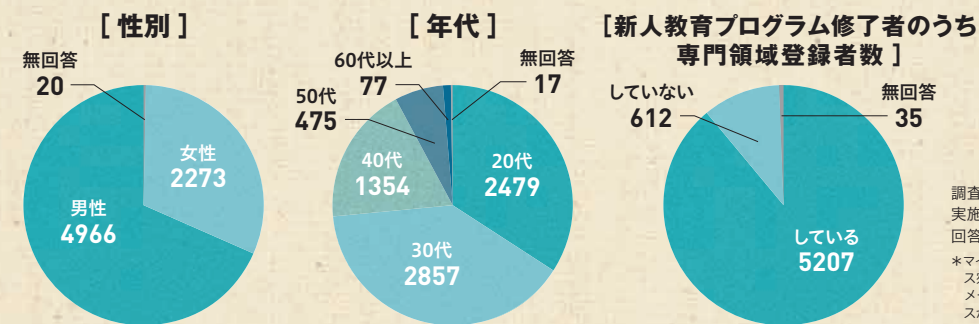
Q2 直近5年以内に開催された「理学療法学術大会」に参加したことはありますか？
参加した理由、しなかった理由を教えてください。



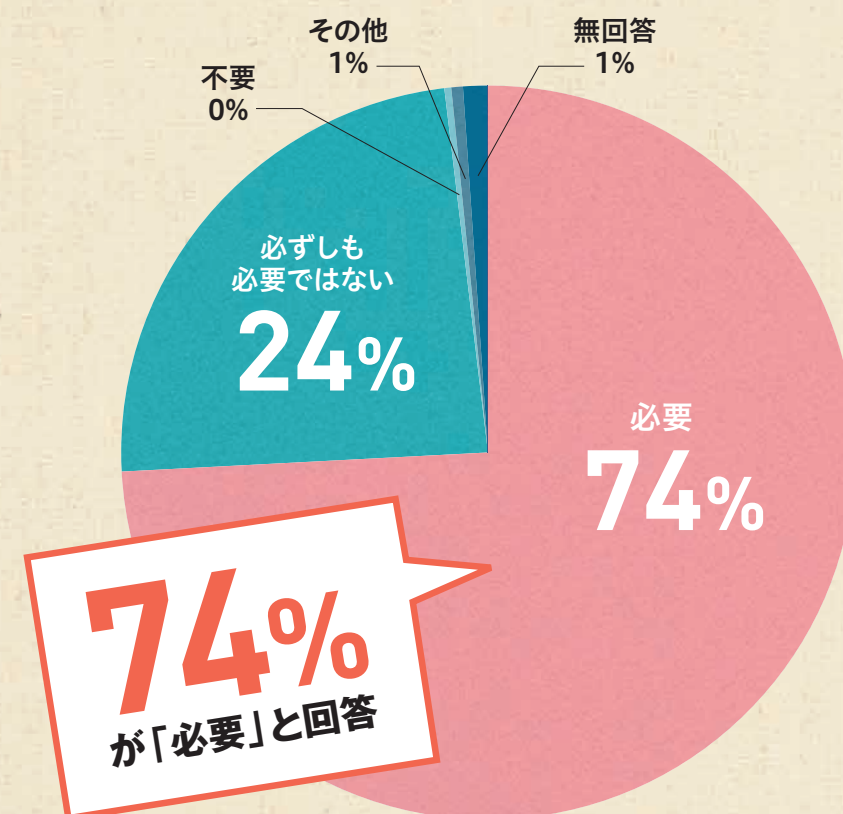
Q3 2018年に開催される「第53回日本理学療法学術大会」に参加する予定はありますか？
参加する理由、しない理由を教えてください。



JPTA NEWSは会員の皆さんと作る冊子です。
(「意見」感想「質問等」お寄せください。)



Q1 理学療法士として働くうえで、論文を読んだり、研究や論文執筆を行ったり学会へ参加したりすることは必要だと思いますか？



自分で必要だと思ったときに、調べたり、学会へ行ってみようと思います。
(岡山県30代男性)

論文を読むことは必要ですが、研究や論文執筆は必ずしも必要とは思いません。
(山形県20代女性)

必要とは思いますが、個人的に学術的な部分と職人的な部分があると思う。バランスが必要。
(熊本県40代男性)

74%の会員の皆さんは、理学療法士として働くうえで、「学問」は必要だと答えていました。論文執筆や、研究発表まではハードルが高くても、学会に参加したり、論文を読んだりすることは比較的手軽にできる学術活動であるのご意見も寄せられています。

では、理学療法学術大会を例にどのくらいの方が参加しているのか、結果を見てみましょう。

網本…平たい表現をすれば、その道のトップランナーの方の話を聞いて、最新の知識を得るというのも学術大会に参加する大きな目的の一つですね。そう考えると、学術大会には教育的な側面もあるのだと思います。

半田…教育や研修という面にフォーカスを当てて考えれば、学術大会は科学を追究するということがそもそもの意義で

日本理学療法士学会
学会運営審議会 議長

公益社団法人
日本理学療法士協会 会長

網本 和氏

半田 一登

前ページのアンケート*では学術活動の必要性を多くの方が感じている一方、来年の学術大会に参加する方は少ない、という結果になりました。その結果を踏まえ、今回の対談では来年から分科学会主催の分散開催となる学術大会について、学会運営審議会議長の網本和氏にお話を伺います。

ニーズから考える、学術大会の在り方

網本…ところで学術大会に行くといつも気になるのですが、頻繁に同じようなメンバーに会うことがあります。常に参加したり論文を執筆したりしている人たちがいる一方、あまりそういうことに関わらない人たちもいて、両者が分かれてしまっ

参加しやすい環境の提供

ているように感じます。

半田…確かにそこは非常に大きな課題だと思います。なぜ参加しにくいのかと考えると、二つには、今の理学療法士の労働環境が原因になっているのではないかと思うところがありま

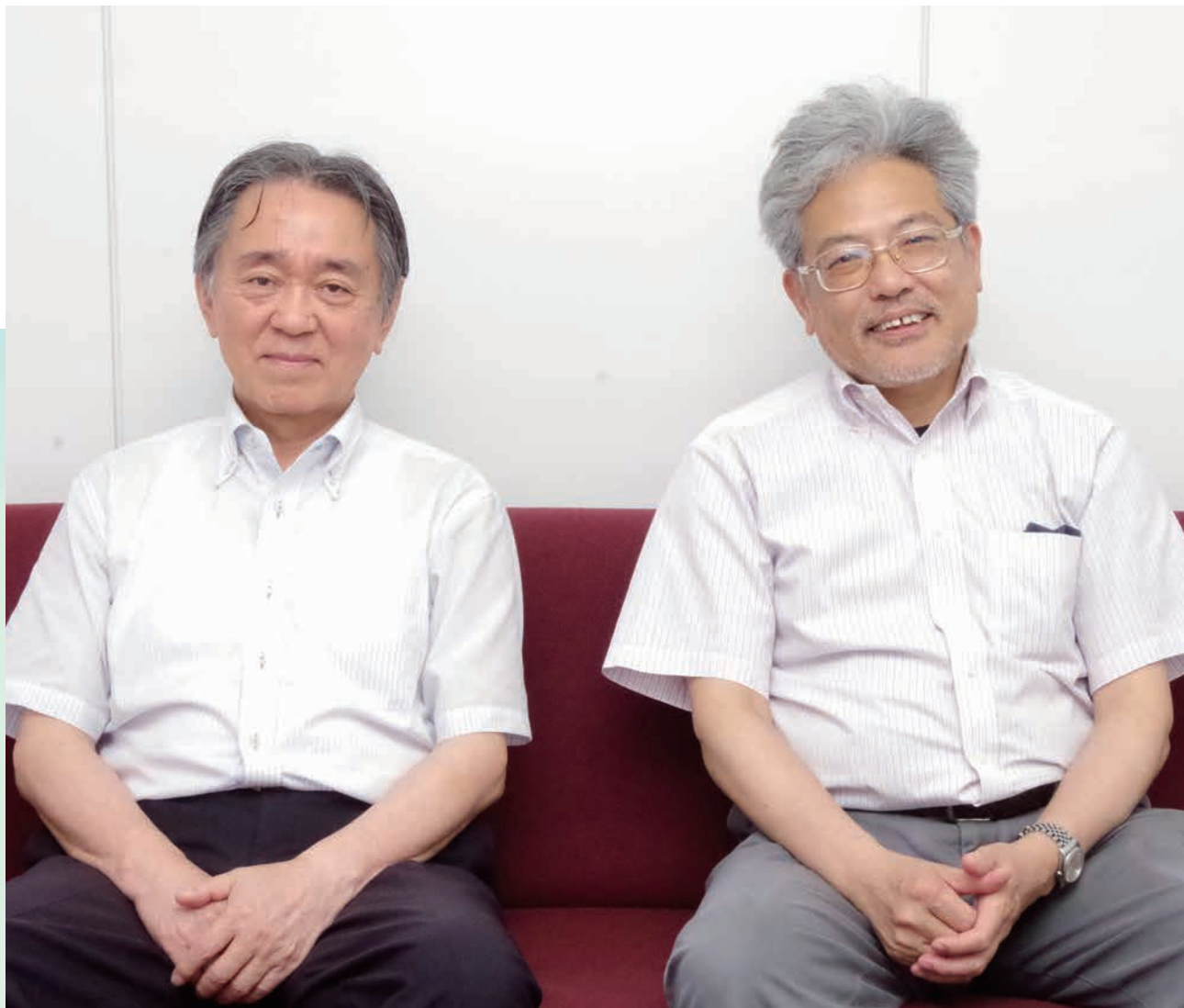
学術大会は科学を追究する場

網本…アンケートの結果を興味深く見させていただきました。まずは、「理学療法士として働くうえで、論文を読んだり、研究や論文執筆を行ったり学会へ参加したりすることなどは必要」だと思うという回答が、74%に上ったんですね。これはまずまず高いパーセンテージかなと思います。直近5年以内で学術大会に参加したことがある方の割合を見ると61%に若干下がっていますが、実人数を考えると、これまでの学会参加者はおよそ6000人から7000人で推移しています。もっとも、論文を執筆する、研究発表を行うなどいろいろな方法がある中で、学術大会に参加するというのはいちばん手取り早い学術活動ではない

かなと思います。ですので学会運営審議会の議長という立場としては、もう少し多くの方に参加していただけたらと良いかなと思います。

半田…そうですね。もちろん、参加者の数だけで良し悪しを考えると良いものかなとは思いますが、若い人たちにはどんなに参加していただいて、さらには論文執筆や研究発表にもチャレンジしていただきたいです。うまくいったかどうかは二の次で、チャレンジしたという事実自体が貴重な経験になると思います。発表する立場で参加すれば学術大会は自己主張をする場になりますし、発表をしなくても他人の自己主張を聞く場になります。

*JPTA NEWS 314(8月号)アンケート 実施期間:2018年6月22日～28日 回答者数:7259名



す。端的に言えば、職場を離れることが以前よりも確実に難しくなっています。一人職場、二人職場で土日も関係なく働いている理学療法士は多いです。そのような中で、全国のある一か所で年一回だけ開催される学術大会に合わせるのにはなかなか難しい。もちろん学術活動自体にあまり関心がない方もいるかもしれませんが、関心があっても職場環境によって参加できない方も多いと思います。

網本…そういう意味では、今年から本格的に学術大会が分科学会主体の分散開催となることで、どう変わっていくでしょうか。昨年は、連合大会もありましたので概に比較はできませんが、分散開催の学術大会トータル参加者は6000人程だったと聞いています。今年はずっと増えて、7000人を超えるのではないかと考えています。

半田…やはり分散開催になると参加しやすくなる面はあると思います。自分が住んでいる場所に近いところで開催される機会が増えてきますから。しかし、もちろんデメリットもあって、例えば運動器の学術大会に参加したいけれども神経の学術大会にも行きたいと思ったときに、何度も職場を離れて参加することはやはり難しくなりますね。私は思うのですが、そういう時に今度はブロック学会が生きてくるのではないかと思うのです。ブロック学会は地域ごとに開催されますので、比較的近くで開催されますし、かつ、各分野を網羅した総合的な学術大会として開催されるので、分野によって発表を聴けないというデメリットも解消できます。そのように、一つの学術大会ですべてのニーズをカバーしようとするのではなく、先ほどの学術研修大会の例も同様ですが、複数の仕組みが相互に補完し合って、有機的に効果を生み

出していける体制を整えていけると良いのではないかと思います。体制を整えるという観点からいえば、今年から学会法人化検討委員会を立ち上げて、日本理学療法士学会あるいは各分科学会を法人化するかどうか、法人化する場合、学会と協会とでどう連携していけば良いかといった議論を本格的に始めました。もちろんその場合はここでも有機的な関係の構築が重要になってきます。

質の高い学術大会へ

半田…このようなことを踏まえると、単に参加者数や演題数を増やすことにこだわるのではなくて、学術大会を開催することの意義をもう一度考えることが必要かなと思います。先ほどもお話した通り、学術大会のもともとの意義は理学療法を科学として追究するという点とで、分科学会主体の分散開

催となってもそれは同じです。そうすると、そういう場に参加しに来ていただく方が求めているものは何だろうかと考えた時に、例えばただ演題数を増やしていくことよりも、中身、つまり科学的な質を高めていくことが大事だと思います。

網本…仰る通りだと思います。



今、分散開催の効果を検証するためにワーキンググループを立ち上げています。そこで、仮に演題数は集まったとしても、その中でエビデンスレベルの高いRCTがどれくらいあるのかなど、質的な検証を行っていく必要があると考えています。もちろん症例報告、例報告も大事ですが、それだけではなく、究極的には何万というデータを扱ったビッグデータというか、大量のデータを扱ったリサーチがあったり、その間に科学的な

デザインとしてランダム化比較試験があったりなど、いろいろなバリエーションに富んだ研究が見られることが理想です。

半田…そのような質的な検証を通じて、リーダーシップを発揮して全体を引っ張っていただけるような方々にも出てきてほしいですし、それぞれの分野が発展していいほしいと思います。また、例えば日本リハビリテーション医学会など医師の学会に行くと感じるのですが、意見交換や質疑応答が非常に激しく飛び交っています。聴講者も、少し目立った発表を聴くと追試をしてみても、発表内容と違えばすぐに指摘をしたりする。若い方々には、ぜひ他種類の学会を含めて積極的に足を運び、そういう経験をしていただきたいです。その経験をすれば、やはり学会で発表する側も発表を聞く側も、参加の仕方、あるいは努力の仕方がずいぶん変わってくると思います。

い加減なことではできないという緊張感が今よりもいっそう増すと思うのです。質を高める意味では、このような場に学術大会がなっていきたいと思います。

網本…そういう質の高さと同時に、分散開催のメリットである参加のしやすさによる裾野の広がり。この双方が良い影響を及ぼし合って、多くの会員が学術活動に親しめるようになっていきたいと思います。

半田…そうですね。今後ともよろしく願います。

網本…よろしく願います。

どのような「学問」をしていますか？ 会員インタビュー

研究・論文執筆

経験年数：10年目 [茨城県]

松田 真由美 さん

Mayumi Matsuda

私は、茨城県立医療大学付属病院で臨床業務に従事しながら、大学院で小児を対象にした臨床研究を行っています。現在、脳性麻痺の下肢痙縮に対するボツリヌス治療後の歩行解析やロボットリハビリテーションの研究を行っています。

私が研究活動を行うようになったきっかけは、院内や県内の研究発表を見た先生方から進学を勧められたことです。当初は、先輩方の臨床スキルに近づきたい一心で臨床業務にあたっていたため、講習会に参加することはあっても、研究活動の必要性を感じていませんでした。臨床も十分に出来ていないのに研究なんて無謀すぎると、進学に2、3年足踏みしていました。茨城県立医療大学大学院へ進学し今思う事は、一人で行っていた研究に指導教員や多くの方々が助言を下さる事への有難さ、自身の研究をまとめ、発信する事で多分野の方との繋がりが増え、見識を広げる機会を頂けていることです。

日々臨床業務を行いながら、論文執筆や学会発表を行うことには活力と時間が必要です。一方で、客観的データをまとめる作業を繰り返すことにより、臨床における着目点が広がり、臨床推論に深さが増すなど自身の変化を感じています。私自身、女性としてライフプランを見据えながら、患者さん一人一人に還元できるような研究活動を継続していきたいと思っています。この思いを同年代の方々と共有できたら幸いです。



学術大会参加

経験年数：3年目 [愛知県]

永田 健太郎 さん

Kentaro Nagata

各分科学会が集う最後の学術大会ということで第52回日本理学療法学会学術大会に参加しましたが、多くの分野に興味を持つ若手としては大変貴重な時間でした。2日目に行われた、シンポジウム2「世界へ挑戦しよう—海外留学のすすめ—」に参加しました。研究や国際協力で活躍されている先生方の経験から語られるお話はとても魅力的でした。また、学会を通し学生時代の友人と再会し、お互いの現状を語り合ったことも、これからの臨床での励みとなりました。



学術大会参加

経験年数：2年目 [東京都]

中島 志保 さん

Shiho Nakajima

昨年、就職して1年目でしたが、第52回日本理学療法学会学術大会に参加しました。正直なところ、研究発表などを聴いても分からないことがほとんどで、とても難しかった印象が残っています。ただ、本当に大勢の方が参加されているのを目の当たりにして、これから頑張らないといけないと気が引き締められました。経験を積んでいけば理解できる内容も少しずつ増えていくと思うので、今後も機会を見つけて参加したいと思っています。



JPTA NEWS 314アンケート*では、「理学療法士として働くうえで、論文を読んだり、研究や論文執筆を行ったり学会へ参加したりすることなどは必要だと思いますか?」という質問に対して74%以上の方が「必要」と答えていました。ここでは実際に学会に参加したり研究活動を行ったりしている会員の皆さんにお話を伺ってみたいと思います。

*JPTA NEWS 314(8月号)アンケート
実施期間：2018年6月22日～28日
回答者数：7259名



経験年数：9年目 [長崎県]

本田 祐一郎 さん

Yuichiro Honda

私は長崎大学病院リハビリテーション部で勤務しながら、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の沖田 実教授が主催されている運動障害リハビリテーション学研究室に客員研究員として在籍しています。そして、臨床で治療に難渋することが多い「拘縮」の発生や進行に関わるメカニズムの解明とそれらを基盤とした新たな治療戦略の開発に取り組んでいます。

学術活動としては日本基礎理学療法学会や日本ペインリハビリテーション学会に参加しており、いずれも各分野のトップランナーの先生方から御指導を賜ることができる非常に刺激的かつ魅力的な学会です。そして、このような学術活動を続けていく中で「病態やメカニズムを基盤としたリハビリテーションを患者さんに提供できるようになりたい」という高い志を持った大切な仲間と出会うことが出来ました。これからも同世代の皆さんと共に理学療法を学術的に追求し、その自己研鑽を患者さんに還元できるよう精進していきたいと思っています。



研究・論文執筆



第53回 日本理学療法学術大会

7月16日に、第2回日本呼吸・心血管・糖尿病理学療法学会合同学術大会が開催され、ついに分科学会ごとの学術大会分散開催がスタートしました。今後も学術大会の開催が続きますので、皆さんの興味・関心のある領域に応じてぜひご参加ください。

Let's join
our
congress

学術大会名	会期	会場	大会長
第2回日本呼吸・心血管・糖尿病理学療法学会合同学術大会	2018年7月16日(月・祝)	パシフィコ横浜	大平 雅美
第5回日本呼吸理学療法学会学術大会			関川 清一
第3回日本心管理理学療法学会学術大会			渡辺 敏
第5回日本糖尿病理学療法学会学術大会			大平 雅美
第7回日本支援工理学療法学会学術大会	2018年9月29日(土)	大阪人間科学大学	長倉 裕二
第5回日本予防理学療法学会学術大会 共催：産業理学療法部門、栄養・嚥下理学療法部門	2018年10月20日(土)～21日(日)	北九州国際会議場	廣滋 恵一
第7回日本理学療法教育学会学術大会 合同開催：第1回理学療法管理部門研究会	2018年11月3日(土)～4日(日)	兵庫医療大学	日高 正巳
第16回日本神経理学療法学会学術大会	2018年11月10日(土)～11日(日)	グランキューブ大阪	吉尾 雅春
第5回日本スポーツ理学療法学会学術大会	2018年12月8日(土)～9日(日)	日本大学文理学部 百周年記念館	小林 寛和
第5回日本地域理学療法学会学術大会	2018年12月8日(土)～9日(日)	パシフィコ横浜	隆島 研吾
第6回日本運動器理学療法学会学術大会 共催：徒手理学療法部門、ウイメンズヘルス・メンズヘルス理学療法部門	2018年12月15日(土)～16日(日)	福岡国際会議場	木藤 伸宏
第23回日本基礎理学療法学会学術大会	2018年12月15日(土)～16日(日)	京都テルサ	市橋 則明
第5回日本小児理学療法学会学術大会	2018年12月22日(土)～23日(日・祝)	グランキューブ大阪	日浦 伸祐

第54回 日本理学療法学術大会

次年度(2019年度)の学術大会も開催日程がほぼ決定しています。

演題投稿は早めにスタートする場合がありますので、随時情報をチェックしてください。

学術大会名	会期	会場	大会長
第8回日本支援工理学療法学会学術大会	2019年9月7日(土)～8日(日)	アクトシティ浜松コンgresセンター	原 和彦
第4回日本心管理理学療法学会学術大会	2019年9月14日(土)	沖縄コンベンションセンター	内山 寛
第6回日本糖尿病理学療法学会学術大会			浅田 史成
第17回日本神経理学療法学会学術大会	2019年9月28日(土)～29日(日)	パシフィコ横浜	高村 浩司
第7回日本運動器理学療法学会学術大会 共催：徒手理学療法部門、ウイメンズヘルス・メンズヘルス理学療法部門	2019年10月4日(金)～6日(日)	岡山コンベンションセンター	山田 英司
第6回日本予防理学療法学会学術大会 共催：産業理学療法部門、栄養・嚥下理学療法部門	2019年10月19日(土)～20日(日)	広島国際会議場	浦辺 幸夫
第6回日本呼吸理学療法学会学術大会	2019年11月10日(日)	ウイנקあいち	岸川 典明
第24回日本基礎理学療法学会学術大会	2019年11月30日(土)～12月1日(日)	朱鷺メッセ：新潟コンベンションセンター	大西 英明
第6回日本地域理学療法学会学術大会	2019年12月14日(土)～15日(日)	京都テルサ	池添 冬芽
第6回日本スポーツ理学療法学会学術大会	未定	未定	未定
第8回日本理学療法教育学会学術大会	未定	未定	未定

Support
Activities

日本理学療法士学会では、会員の皆さんの学術活動を支援する取り組みを行っています。ぜひご活用ください。

学術誌「理学療法学」 英文誌「Physical Therapy Research」

臨床の現場でも、エビデンスに基づく理学療法が促進されていますが、そのベースとなるものの一つが学術論文です。研究者としても臨床家としても活用いただける情報を発信すべく、日本理学療法士学会(以下、本学会)では日本語・英語の学術誌を編集・発行しています。

学術誌「理学療法学」、英文誌「Physical Therapy Research」(通称PTR)ともに学術論文データベース「J-stage」で公開されています。皆さんのお手もとに届く前に公開されているのでそちらもぜひご覧ください。

J-stageへアクセスする前に、学会HP内コンテンツ「理学療法学を読もう!」「英文誌を読もう!」で概要を紹介しているので、まずはこちらをチェックのうえ、興味のある論文があれば論文本体をご覧くださいという活用方法もおすすめです。



研究助成

本学会では会員の研究活動支援の一環として、個人会員向けに研究費助成事業を行っています。厳正な審査により採択数は限定されますが、研究はしたいけれども資金が足りない!という方はぜひトライしてください。例年3月～4月にかけて募集しています。

研究助成の成果は学会HPに報告書として掲載しているので、どのような研究が採択されているのか、ぜひご覧ください。



倫理審査

研究活動は社会倫理に照らして適切なものであることが求められます。通常は研究者の所属機関に倫理審査機関が設置されますが、設置されていない施設も数多くあります。本学会では、研究活動に熱意のある会員の方を支援するため、倫理審査部会を設置し、倫理審査を受け付けています。

対象となる研究は、本学会学術誌に論文投稿予定のもの、本学会の研究助成に応募予定のものと限定的ですが、倫理審査を通ることが研究活動の第一歩です。





不名誉なことですが、理学療法士による犯罪がネットニュースや新聞報道で散見されます。盗撮、未成年者との淫行、暴力行為、窃盗などです。このような犯罪を行うと警察に逮捕され、多くの場合、裁判にかけられます。裁判の結果、有罪となり、罰金、禁錮・懲役などが科せられることがあります。職場を解雇され、家庭のある方であれば離婚という話も聞きます。これは刑事罰、社会的制裁であり、賠償金の支払いなどの民事上の責任を負うことも珍しくありません。

医師、理学療法士、看護師など国家資格を持っている場合、これに加えて免許の停止、取り消しを受けることがあります。理学療法士及び作業療法士法に罰金刑以上の刑に科せられた場合、免許の取り

免許停止・取消し

消し、名称使用の停止（免許）を行うことがあると書かれています。国家試験に合格し、免許の申請を行った場合も同様です。

罰金刑とはどの程度の行為で科せられるのでしょうか。例えば、酒気帯び運転をした場合は、3年以下の懲役又は50万円以下の罰金です。故意・過失を問わず、他人に暴力をふるいケガをさせ罰金刑、禁錮・懲役に科せられることがあります。性犯罪も同様です。酒気帯び運転では、同乗者と一緒に飲んでいた人も罪に問われることがあり、罰金刑以上になれば、免許停止・取り消しの可能性があります。十分に気を付けてください。

教えて！田中まさし先生！

このコーナーでは、本会理事の田中まさしが全国を訪問し、若手会員の皆さんからいただいた様々な相談に丁寧にお答えしていきます。ご質問はJPTA NEWS 編集担当までお送りください。

田中まさし公認ゆるキャラ まーくん



田中 まさし
Masashi Tanaka

1965年10月11日 北海道札幌市生まれ
1987年 清恵会第二医療専門学院卒業後
河内総合病院・上山病院・札幌東洲会病院
1995年 北海道千歳リハビリテーション学院
（副学院長、理学療法学科長）
2010年 北翔大学大学院人間福祉学研究所
人間福祉学専攻修了（修士）

会員限定コンテンツに
アクセスしよう！

<http://www.japanpt.or.jp>

Click!



A まず理学療法士の果たすべき役割である「移動能力の獲得」は常に担保されなければなりません。そのうえで最近の未来投資会議（政府が主導する成長戦略と構造改革を加速化するための会議）や財務省の資料を見ると、今後さらに求められるのは「地域包括ケア」「オンライン医療・介護」「多職種連携」「予防」であると考えられます。

在宅等における運動機能および移動能力を含む生活能力や栄養摂取状況、フレイルを含む障害および要介護状態をモニタリングして、必要な指導を行うとともに、薬剤師や看護師、栄養士などと情報共有して、必要な医療や介護の提供を誘導できる指導・マネジメント力が求められていくのではないのでしょうか。地域における関連他職種の役割、生活事例に基づく課題発見力、他職種への情報共有と調整などを日常業務でも学んでいただきたいと思います。

Q 今後、社会が理学療法士に求めているものが変わっていくと感じています。その中で身につけておいた方が良い知識や教養、資格があれば教えてください。

岐阜県 Nさん
(20代・男性)

今

から5年ほど前、分科学会を確立し理学療法科学を推進するということを決めました。そのうえで日本理学療法学会大会を平成30年から分散開催とすることを決め、それまでは分科学会の集合体としての学会大会としてきました。そして今年、本格的に分散開催が行われるのですが、理学療法科学の推進という目的を達しつつあるのか否か重要な局面を迎えています。

日本理学療法士協会の学術活動には二

つの大きな課題があり、一つは個々の理学療法士臨床能力を上げること、もう一つは理学療法の科学性を高めることです。厚生労働省では公的保険下での医行為に対し科学性を強く求めており、それは科学的介護における議論にも波及しています。本来、医療は医学を背景としながら、対象者の個性や社会的環境等を考慮したものです。そのように考えると、理学療法の科学性と臨床能力の引き上げは、切り離せない表裏一体の関係にあります。理学療法科



学の推進が臨床に強く結びつき統合されていることが必要だと強く感じます。

一方、日本理学療法学会研修大会も転換期を迎えています。今年の春に茨城県で開催した研修大会は大きくリニューアルされたものでした。その特徴は“臨床技能を極める”ことを目的として、参加型の研修会にしたことです。担当した茨城県理学療法士会は多彩なアイデアを実行に移しましたが、いずれにしても10万人を超える会員の臨床能力を上げるための方法論は多重

的で丁寧なものである必要があります。この研修大会の目的を達成するためにも学会との連携は重要です。

今後、本会の学術活動という大きな視点から学会活動を捉え、学会と研修大会が有機的に連携することが大切です。また、分野に特化した分科学会の弱点である、総合的に学ぶ機会というものブロック学会等で補完することも考える必要があり、会員にとってベストな総合的学術活動を構築することが理学療法士の発展につながります。

日本理学療法士学会への期待

会長
半田 一登

第6回
「笑顔をあきらめない。」写真コンテスト
最優秀賞



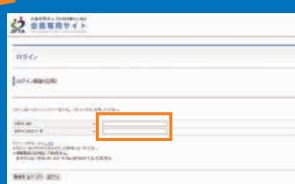
作品題：おじちゃん、見て見て、立てた！ 作者：春田 大志 様

会員の
皆様へお願い

2018年度、協会のホームページ【会員の方へ】のコンテンツがマイページ内「会員限定コンテンツ」に一部移行します。ログインID・PWを確認してください。

会員限定コンテンツにアクセスしよう！

<http://www.japanpt.or.jp>



各広報媒体(JPTA NEWS・FAX通信など)の掲載をはじめ、会員の方のみ閲覧可能な情報を随時更新していきます。ぜひご覧ください。



公益社団法人
日本理学療法士協会
Japanese Physical Therapy Association

